

地域資源循環調査に参加して日本の食生活を思う <<宮崎・都城>>

2003 年秋から冬にかけて都城地域の畜産農家を中心とした地域資源利活用の現況調査に参加する機会を得た。今回の調査では、牛の肥育・繁殖農家を対象に飼料生産、家畜糞尿の利用、輸入飼料利用の量と種類などを農家規模別に聞き取り調査を行い、地域資源の利活用と移入資源の地域に及ぼす状況をエネルギー資源循環の観点から把握していこうとするものである。調査対象地域である都城地域は宮崎県の南西部に位置し、南に鹿児島県、西に霧島連山の麓の盆地であり、畜産業の盛んな地域である。

調査対象農家の農地利用では自給用の稲生産と家畜用の飼料生産が中心であり、また家畜糞尿はほとんど飼料生産用の農地に還元されている。一般的に繁殖農家は肥育農家と比較して家内の、小規模な経営を行っている。繁殖農家での粗飼料利用はその多くが地域内生産でまかなわれている一方、肥育農家では経営規模も比較的大きいことから粗飼料の一部を輸入に頼る農家も多い。配合飼料は農協、商社などから購入されており、多くが輸入飼料の加工品と考えられる。実際、配合飼料の材料であるトウモロコシ、麦類・ふすまなどの国内生産は少なく、多くを輸入に頼っている状況であろう。こうした状況下、都城地域では地場生産の有機資材の積極的利用と環境保全に目を向けた畜産業振興に力を注いでおり、安全で高品質な食肉生産に努力が向けられていることを感じる。

今回の調査は都城地域の畜産業の状況把握を 1 事例として、地域農業活動における総合的な見地に立脚したエネルギーや資源の循環を検討することであったが、調査を通して日本の食糧生産、食料消費のあり方を考えさせられた。

日本の平成 14 年の自給率はカロリー換算で 40%、飼料を含む穀物自給ではわずか 28%になっている。農林省の試算では国内耕地面積 476 万 ha に対し、これら輸入作物の生産のため海外に依存している作付面積は 1200 万 ha であり、また輸入のために大量の輸送費（エネルギー）も消費されている。さらに別の試算では輸入穀物生産に利用されている水資源量は約 480 億トンと、ほぼ日本の農業用水量（560 億トン）に匹敵する量であり、間接的にはこうした水資源も輸入していることになる。このような大量の食糧の輸入、海外水資源とエネルギーの利用によって確保されている食糧確保事情がある一方、国内では 25%の食料が流通・個人消費の段階で廃棄されているとも言われている。今日の食の問題は、単に我々が食べる食料の量や安全性の確保ばかりでなく、地球規模での環境保全との関わりを同時並行的に考えなくてはいけないのではなかろうか。

（農家調査に参加して：財津、2004 年）



肥育農家の牛舎内



冬季におけるイリアンライグラス生産農地



生産飼料の保管（ロールペールとサイレージ）